

## 論文の和文要旨

論文題目：

ロシア語の名詞句における格と一致をめぐって

氏名：

匹田 剛

ロシア語の名詞句には一致定語(AM)の主要部名詞との一致とその名詞句を主語とする述語の一致が見られる。本稿の目的はそれらの一致について典型的な名詞句だけでなく、典型から外れた数量詞句などより多くの名詞句を網羅した文法の構築である。

1.では Corbett (1978a, b, c)が示したロシア語の数(量)詞(Q)の連続体性を紹介し、本稿ではその数量詞の非離散的性質を離散的な説明理論で説明することを目指すとした。

続く 2.では議論の記述的・理論的前提を確認した。まず、名詞句内の一致素性は以下の通りである。

(1) 性=男性 : [+m, -f](=[m]), 女性 : [-m, +f](=[f]), 中性 : [-m, -f](=[n])

数=単数 : [-pl](=[sg]), 複数 : [+pl](=[pl])

有生性=有生 : [+an](=[an]), 無生[-an](=[in])

屈折タイプ=第 1 : [I], 第 2 : [II], 第 3 : [III], 第 4 : [IV], 不変化 : [indc]

さらに名詞と形容詞などの一致定語(AM)のもつ文法素性を以下の様に整理した。

(2)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
屈折タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]
格	[ø]

(3)AM の文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
屈折タイプ	x
格	[ø]

さらにいくつかの Q についても以下の通りまとめた。なお、「1」は AM と同じである。

(4)「2」(PcQ)

数	×
性	[∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(5)「3, 4」(PcQ)

数	×
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(6)「5～100」(HQ)

数	× / ([sg/pl])
性	×
有生性	×
屈折タイプ	[{III/IV}]
格	[∅]

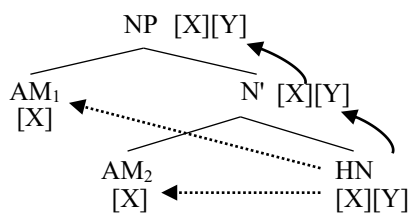
(7)「1,000～」(NQ)

数	[sg/pl]
性	[{m/f}]
有生性	[in]
屈折タイプ	[{I/II}]
格	[∅]

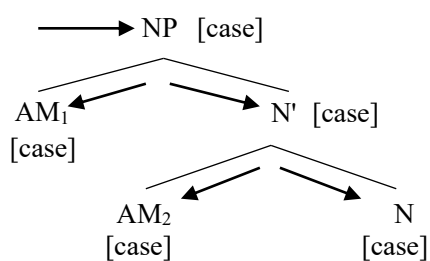
なお、これらのQの素性については以後の議論で修正が加えられる。

また、NP内の一致素性のコピーには句節への上向きのもとの末端の語彙項目への横向きのものであるとした上で、格は句の頂点に付与された後、末端まで浸透して行くものであるとした。

(8)



(9)



さらに Babby (1987)は以下の様に仮定することで NP 内に複数の格が混在する様を説明している。

- (10) (a) GenQ という 7つめの格を想定
- (b) 構造格 : Nom, Acc, GenQ
- (c) 語彙格 : Gen, Loc, Dat, Ins
- (d) 語彙格 > 構造格
- (e) 局所性原理により近いものが優先

また、これに伴い Q の格付与能力は以下の通りと考える。

- (11)数量詞が付与する格

один	РсQ	HQ	NQ
×	GenQ	GenQ	Gen

なお、NP に格を付与することによって通常はそこから一致素性が外に向けてコピーできなくなることを指摘し、格付与によってその節点の上に格境界(CB)が形成されるとした。それに加えて以下の規則を設定した。

- (12)性の削除規則

[gender X] → ∅, if [pl]

- (13)屈折タイプの削除規則

[DecType X] → ∅ if, [pl]

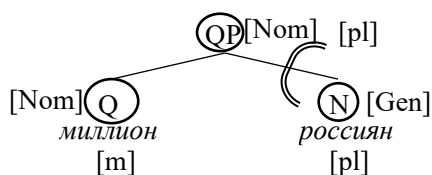
続く 3.では QP が主語となる述語の一致について議論した。述語はその主語 QP の Q 次第で最大で 3つのバリエーションが可能である。

- (14) NQ (複数, 中性, Q との一致)

Миллион россиян посетило/посетил/посетили Америку.  
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc  
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

複数での一致を pl.3, 中性での一致を n.sg.3 と呼び、Q ごとの可能なパターンを整理して議論した。まず pl.3 は意味によって引き起こされるのではなく形式的な条件で起こるものであるとした上で、一致パターンの違いは一致のコントローラー(Ctrl)に指定した節点の違いによってもたらされると結論づけた。

- (15)



QP を Ctrl とした場合は N から上がってきた[pl]で一致するので pl.3, Q を Ctrl としたなら миллион に一致して男性形, N なら格が主格でないため一致できずデフォルトの n.sg.3 となる. 典型的 NP ならパターンは 1 つしか認められないが, QP は CB の下の N から素性が QP にコピー可能で, CB の下の N を Ctrl に指定可能なためこのように最大 3 種類の一致が可能になる.

さらに 4. では 3. で残された問題の解決を目指した. すなわち Q が「2~3」(PcQ) の場合の N は一般に単数属格形と理解されているが, それは 3. で「pl.3 での述語の一致は形式的なもの」としたことに矛盾する. PcQP 主語でも pl.3 の一致が可能だからである. 本稿では秋山 (2002) が提唱する少数[pc]というもう 1 つの数を導入し, 以下の様に規定することでこの問題を解消する.

(16) [sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

(17) [GenQ] 以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

また, これらは他の様々な問題も解決できることも見た.

なお, PcQ と ColQ(集合数詞)は同じ数値を意味していても絶対複数名詞との結合可能性に違いがある. これを説明するためにそれぞれに以下の様な素性とそのスロット, さらにスロットに入る素性に関する表層フィルターを設定した.

(18)「2」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[ (±pl $\emptyset$ ), (±pc $\emptyset$ ) ]
性	[±f $\emptyset$ ]
有生性	[ $\emptyset$ ]
屈折タイプ	x
格	[ $\emptyset$ ]

(19)「3, 4」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[ (±pl $\emptyset$ ), (±pc $\emptyset$ ) ]
性	x
有生性	[ $\emptyset$ ]
屈折タイプ	x
格	[ $\emptyset$ ]

(20) ColQ の素性とそのスロット

数	[ (±pl $\emptyset$ ) ]
性	x
有生性	[ $\emptyset$ ]
屈折タイプ	x
格	[ $\emptyset$ ]

(21) (a)\*[ $\emptyset$ ]

(b)\*[(x, y)]

また、これに伴い上記の規則(17)を以下に改訂した。

(22) [GenQ]以外の格が与えられると  $[\text{num } (\pm\text{pl } X), (\pm\text{pc } Y)] \rightarrow [(\pm\text{pl } X)]$

さらに 5.では対格独自の形態、主格と同形態、属格と同形態の 3 つのパターンがある対格の形態について説明を試みた。これらが AM と N で多くの場合同じパターンを取るので一連の現象を有生性の一致と呼ぶが、AM と N でパターンが異なることもしばしばある。このような「不一致」も含め極力例外なく説明するために、まず属格化規則として以下を設定した。

(23)属格化

有生[an], かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ  
[Acc] → [Gen]

これと(12)と(13)を組み合わせることで実際の言語現実を説明することができた。

一方、Q ごとの振る舞いの違いを説明するために、Q がそれぞれ以下の素性を持っていると考えた。

(24)Q の一致素性とそのスロット

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[∅]	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[∅]	[∅]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[∅]	[∅]	[∅]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]

(25)Q の格付与能力を示す素性

格付与	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100万	
(i) asCase	—	+	+	+	+	+	+	+
(ii) asLex	—	—	—	—	—	±	+	+

(26)N の素性に CB を越えることを認める素性

N の素性の CB を越えた コピー	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100万	
(iii) upNum	—	+	+	+	+	+	+	+
(iv) horNum	—	+	+	+	+	-	-	-
(v) horGend	—	+	-	-	-	-	-	-
(vi) upAni	—	+	+	-	-	-	-	-
(vii) horAni	—	+	+	+	+	-	-	-
(viii) setCtrl	—	+	+	+	+	+	+	-

また主格化は純粋に形態的な条件に従って起こると結論づけた。

(27) 対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

6.では(24)に改訂を加え、PcQ などは[ø]ではなく語彙で与えられている[GenQ](PreGenQ)を持つと結論づけた。問題は(22)に従うと PcQ の性の対立が消えるはずだが実際には以下のように消えないことである。

(28) две                    книги  
two-nom.pl.+f    book-genq.pc.+f  
「2冊の本」

これを解決するために、PcQ と HQ には PreGenQ があると想定した。またこの想定が分配の前置詞 *no* の付与する格が何なのかという謎に答えを与えてくれた。すなわち Franks (1995)が提案する構造格である [DatQ]と PreGenQ を想定すれば本稿の体系によって問題が解決することが示された。

さらに、PreGenQ と [GenQ]の付与能力の獲得から名詞と形容詞の間に新たに数量詞という語類が形成されつつあるのではないか、との仮説も提示した。

7.では 5.で設定した(26)の単純化を行った。これは記述的に正しいとは言え、いかにも煩雑である。

まず横方向のコピー(すなわち[±hor-])は、素性のコピーを受ける Q か AM がそのための空スロットを語彙的に持っているかによって決まる。つまりわざわざ[±hor-]で規定する必要がない。その代わり以下の規定を加えた。

(29)QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探ることができる。

また、受入側の語彙的特徴によって決まりようがない上方向のコピー[±up-]については以下の提案にまとめた。

(30)

- (a) QP において N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。
- (b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様、最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

これによって NQP と QCNP については問題が残るものの、今まで説明できなかった AM と述語の形態の相関関係についても説明ができるようになった。

8.では男性名詞が女性を指示対象とする場合に AM や述語が女性で一致することあることを議論した。この問題は単に女性での一致が起こるだけでなく、AM が女性形で述語が男性形というパターンだけは不可能という問題がある。

まず Pesetsky (2013 39)がこの問題を説明するために提案した  $\mathcal{K}$  を採用する。

(31)

(a)選択的なゼロ形態素  $\mathcal{K}$ ‘女性’は NP 内の特定の境界 (threshold)の上のいかなる点にも併合することができる。「低い形容詞」はこの境界の下にある。

(b) $\mathcal{K}$ が併合されるとその名詞はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。

しかし光井 (2018: 90)は QP に視点を移すと  $\mathcal{K}$  だけでは説明ができない現象があることを指摘し、 $\mathcal{K}$  を非活性化させる以下の条件を提案した。

(32) $\mathcal{K}$ が非活性化される条件：

性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL]

この提案は記述的に大きな成果を上げているが、本稿の方法に組み込むには不都合がある。そのため以下の表層フィルターを提案することで同様の効果を出すことを試みた。

(33) \*[+f] & [I]

なお、[+f]と[I]が相容れないということは他にも様々な領域で観察されここだけのものではないことも確認できている。

最後に 9.ではここまでの議論を一旦まとめた上で本稿の妥当性を確認するために、PcQ も含めて Q と QP の特異な振る舞いを体系的な説明を試みている Pesetsky (2013)と本稿を比較した。その結果、Pesetsky (2013)には目立たぬ形で様々な ad hoc な規定が散見され、本稿の方法の方がよりシンプルであることが見て取れたのではないかと思う。また本稿も見方によっては ad hoc に見える規則などを設定しているようにも見えるが、それらの多くは別の文脈で指摘されている記述的事実に基づいたもので、何らかの形で規定せざるを得ないものであると言える点が大きな違いである。

匹田 (2007)で当該テーマに関わる論文を最初に作成してから、当初は曖昧であった問題も少しずつより正確かつより広範な説明が可能になってきた。また、生成文法の既存の体系に謂わば「リセット」をかけたことで少なくとも当該の問題を説明するためだけなら、かなりシンプルな説明ができたと思われる。またその説明の範囲も広く強力である。ただ、現況本稿での説明体系はその説明の範囲は名詞句の外へはほとんど出ていない。今後その説明範囲を拡大した場合どうなるのかは不明であり今後の課題である。